

米 子 市
教育文化事業団 9
文化財調査報告書

米子城跡 III

——米子市加茂町2-51地点——

1995・3

米子市教育文化事業団

例言

1. 本書は平成5年度において財団法人米子市教育文化事業団が実施した米子城跡Ⅲ（中国電力米子営業所構内遺跡）にかかる報告書である。
2. 調査の組織は下記の通りである。

調査委託	株式会社中国電力
調査主体	財団法人米子市教育文化事業団
調査担当	灘脇俊彦（米子市教育文化事業団派遣調査員）
調査協力	杉谷愛象（米子市教育委員会教育文化課主任）
	植佐知子（米子市教育文化事業団臨時職員）
	福嶋昌子（同 上）
3. 出土遺物は米子市教育委員会で保管している。
4. 本書の編集及び執筆、図面の浄書等は米子市教育文化事業団がこれを行った。

目次

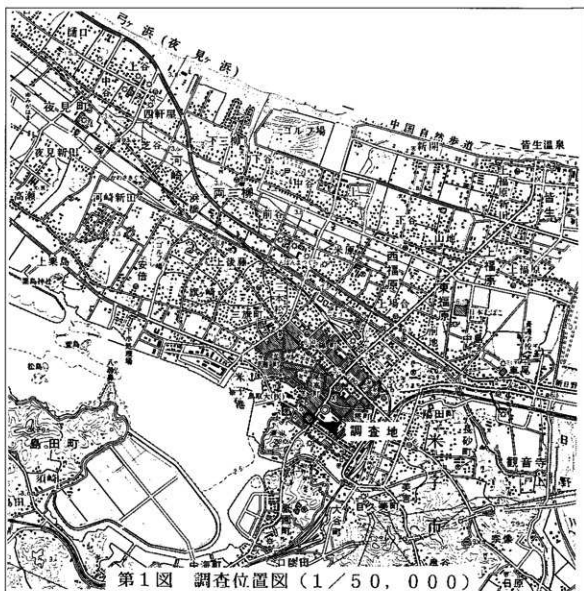
I. はじめに	3
1. 調査の概要	3
2. 位置と環境	4
II. 遺構	7
1. 溝（SD）	7
2. 掘立柱建物（ピット・柱礎石）	8
3. 井戸・桶	8
4. 土 壇	12
5. その他の遺構	12
III. 遺物	12
IV. 小 結	16

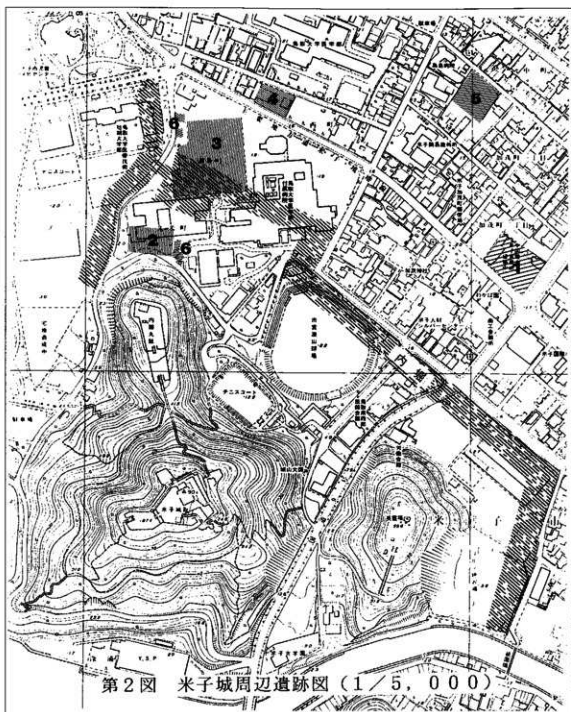
I はじめに

1. 調査の概要

「米子城跡Ⅲ」の調査地は米子市加茂町2丁目51に所在する。中国電力米子営業所の新築建替え工事に伴う事前調査である。

現地調査は1993年11月18日から翌1994年2月6日まで行った。調査対象面積は約600m²であったが、建物の基礎による攪乱部分があったため実際の調査面積は約400m²であった。調査の結果、溝（SD）17本、建物柱跡（SB）を含むピット数156穴、柱の礎石と思われる石列1ヶ所、土壇（SK）13穴、井戸4ヶ所、桶4ヶ所、落込み、縄文遺構と思われる足跡等の遺構を確認した。

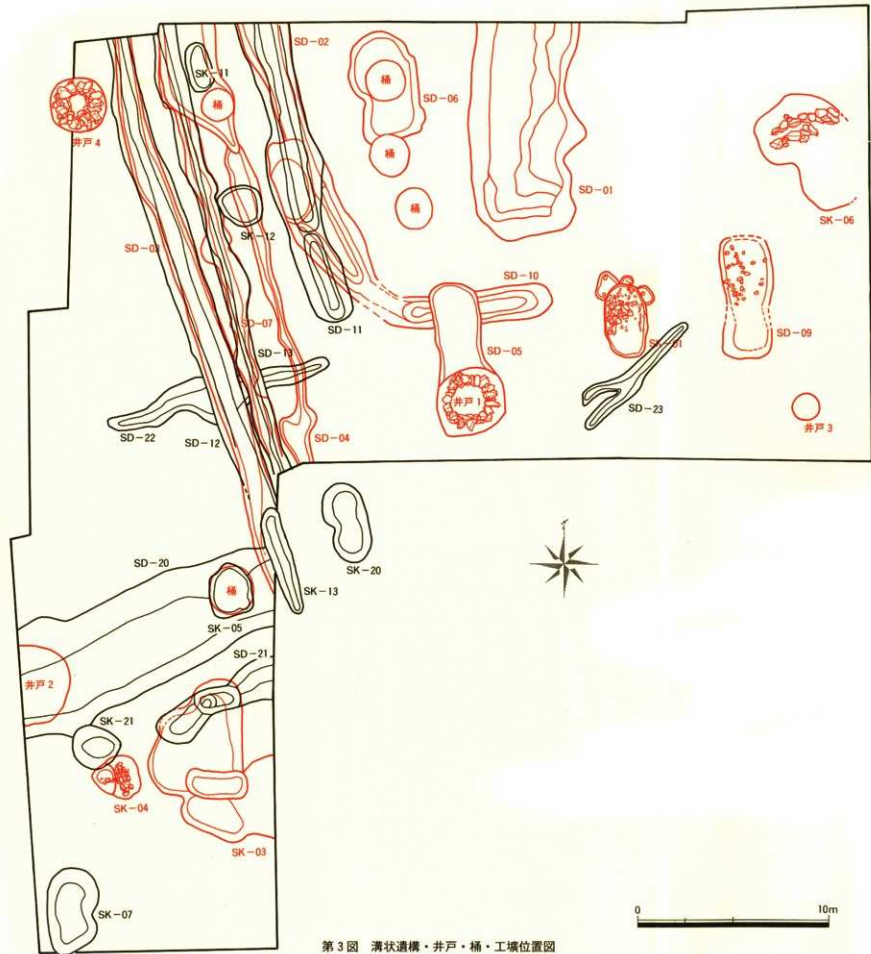




2. 位置と環境

今回の調査地は米子城の内堀りと外堀りの間に位置する武家屋敷のあった所である。

享保5年の絵図によると、この場所は益田助太夫氏の敷地になっており、北隣は山本半助氏の敷地になっている。益田氏は中級クラスの家臣であるが、荒尾家の家臣ではなく鳥取藩からの派遣人だったようである。次に幕末の絵図を見るとこの時にはすでに山本氏の名はなくなっている。明治30年以降には田畑になり、昭和4年に中国電力の建物が建ち現在に至る。



第 3 圖 溝狀遺構・井戸・桶・工堀位置圖

米子城の始まりは、1467（応元）年頃山名教之の門下山名宗幸が飯山に砦を築いたと言われる。伯耆、出雲の国境にあり中海に臨んだこの城の位置は、軍事、政略上の重要地であり、早くから攻守争奪の対象となっていた。

1591（大正19）年に東出雲・隠岐・西伯耆12万石を領有した吉川広家によって築城が始められ、当時の城主は占夷吉種であった。関ヶ原以後1600（慶長5）年に伯耆18万石の領主となった中村一忠が、今日に伝わる城郭を完成させたといわれる。

その後中村氏は在城8年で断絶となり、1610年加藤貞泰、1617年池田由之を経て、1632（寛永9）年より池田家家老荒尾氏預かり一万五千石となり、以後1869（明治2）年まで続いた。1667年には城西北部外曲輪、1852年には四重櫓とその石垣の修理が行われる。城は1872年土族に払い下げとなり、1880年頃に壊される。

この周辺には②久米第一遺跡、③米子城跡Ⅰ（鳥取大学医学部構内）、④米子城跡Ⅱ（現ガソリンスタンド）、⑤米子城跡Ⅳ（現マンション）、⑥米子城跡Ⅴ（鳥取大学医学部浄化層）など米子城関係の遺跡の調査が次々と行われている（第2図）。今までの調査では、米子城内堀と潮止めの石垣や武家屋敷跡などの遺構を検出している。今回の調査でもおなじく武家屋敷跡を確認しており、当時の様子が少しづつではあるがまた見えてきたようである。

II 遺 構

1. 溝（SD）（第3図）

全部で17の溝を検出している。それぞれの正確な時期は不明であるが、SD-11・12・13などはかなり古い時期から使われていたと思われるが、その他は出土遺物からみてほとんどが江戸から明治時代にかけてのものと思われる。

SD-01・05・06・08・09は南北方向、SD-02~04・07・11~13はN15°~20°W方向にほぼ平行し、SD-10は東西方向、SD-20~22はE25°N、SD-23はE45°N方向に流れる。

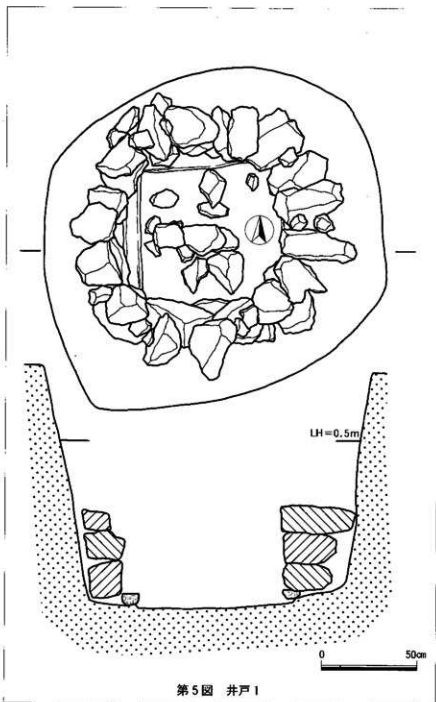
それぞれの規模はSD-01幅約2.9m・深さ58.5cm、SD-02幅0.7~1.5m・深さ22.3cm、SD-03幅0.65~0.95m・深さ15.6cm、SD-04幅0.65~0.8m・深さ12.4cmである。SD-05幅0.6~0.75m、SD-06幅1.4~1.8m・深さ15.6cm、SD-07幅0.3~0.8m・深さ33.7cm、SD-08幅0.9~1.4m、SD-09幅1.3~1.6m・深さ16.7cm、SD-10幅0.9m・深さ65.6cmで、もともとはSD-02と繋がっていたようである。SD-11幅0.95~1.5m・深さ60cm、SD-12幅0.85~1.0m・深さ37cm、SD-13幅0.5~0.8m・深さ33.1cm、SD-20幅2.2~2.6m・深さ26cm、SD-21幅0.65~0.85m・深さ25.7cm、SD-22幅0.5~1.3m・深さ19.6cm、SD-23幅0.4~0.65m、深さ19.6cmであった。

花粉分析の結果、SD-11・12・13の中からイネの花粉が多く見られ、また放射性炭素年代測定の結果、SD-12の最下層で縄文時代晩期という結果が得られた。このことからかなり古い時期からこの地では稲作が行われたようである。そして16cの遺物が検出されていることから、一時空白期を経て江戸の町並みができるまでこの周辺では稲作が営まれていたようである。またそれぞれSD-02・03・07と明らかに新しい溝と重複していることから、これらの溝がどのような変遷を経たかが今後の検討課題である。

2. 建物跡 (第4図)

建物跡として柱穴及び礎石と思われる石列を検出した。柱穴は全部で142穴あり、その中で柱の残っていた穴は30穴あった。その中でA列P23-P24-P25-P36-P35-P33-P38-P67、B列P5-P7-P10-P50-P31-P51、C列P53-P102-P16-P18、D列P129-P9-P117-P76-P19など4列の柱穴列が、一軒の建物となるものではなく、補助的な柱跡ではないだろうか。B・C・D列は建て替えの跡で、軒の建物と考えられるが、A列の建物とは方向が僅かに異なる。この違いが時期的なものなのか、単に必要がなかったのかは不明である。

軒先柱の礎石と思われるような石列を検出した。しかしこの石列に伴う柱穴列を確定することはできなかった。

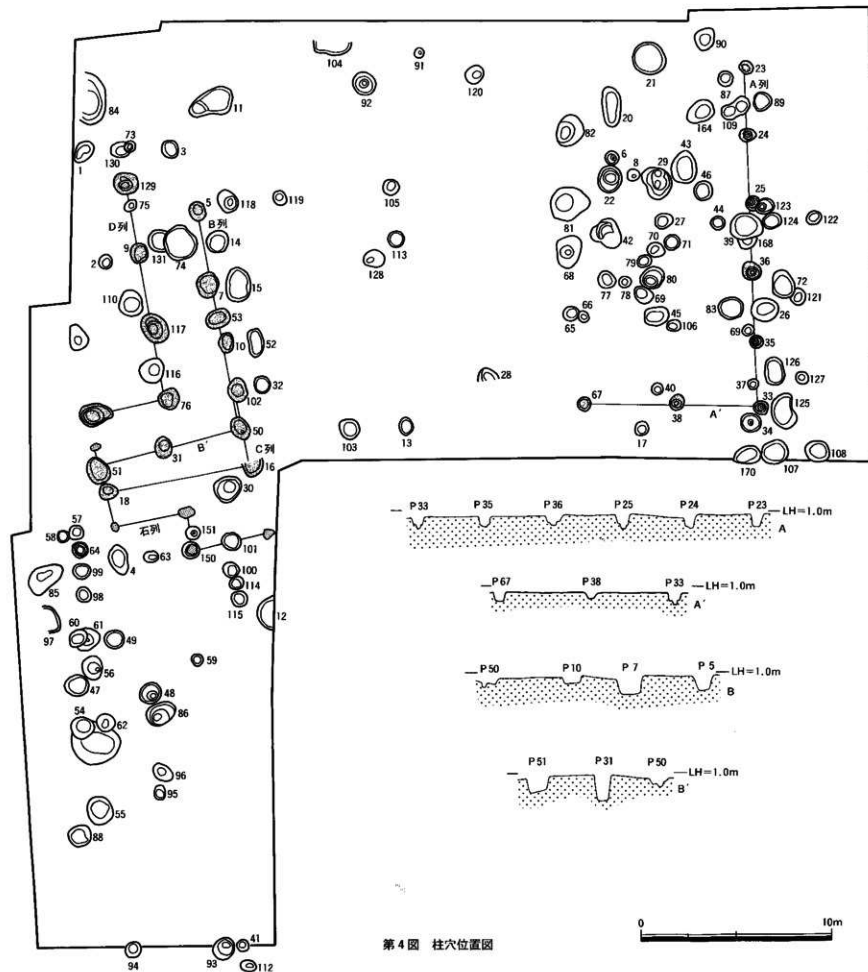


第5図 井戸1

3. 井戸・桶 (第3図)

井戸を全部で4ヶ所検出した。井戸は3ヶ所が石積みのもので、内1ヶ所は掘り方のみ残る。土掘りのものは1ヶ所であった。

井戸1 (第5図) は径約90cm・深さ55cmの石積みが3段が残り、底には約75cm四方に木枠が組んであった。井戸2はおそらく石組の井戸があったと思われ、断面に石材と径約4m・深さ1.3mの掘り方のみが残る。井戸3は土掘りの井戸で径1.4m・深さ1mである。井戸4 (第6図) は径70cm・深さ60cmの石積みが2~3段が残る。桶は5ヶ所検出し、径80cm・深さ30cm前後の木枠が残る。明治時代以降の比較的新しい時代のもと思われる。



PitNo	規格(径-深さ)cm	柱形状	備考
1	70×50-20	無	
2	40×35-18 25×20	無	二段掘
3	50×45-25	無	
4	85×50-24	無	
5	55×40-43	丸形	
6	40×30-25 25×25	無	二段掘
7	70×60-52	楕円形	
8	30-17	無	
9	50×45-30	楕円形	
10	50×40-21	無	
11	120×80-16	無	
12	140-48	無	
13	50×35-8	無	
14	60-16	無	
15	90×65-14	無	
16	55-17	丸形	
17	35-13	無	
18	50×40-34	角形	
19	85×65-44 80×40	丸形	一段掘
20	11×50-10	丸形	
21	90×85-14	無	
22	70×60-40 60×50	無	二段掘
23	35×30-36	無	
24	50×30-36 25×20	無	一段掘
25	40-38 30×25	無	一段掘
26	75×65-36	無	
27	45×40-16	無	
28	55-55	無	
29	90×75-20	半円形	
30	75×68-21 60×50	丸形	二段掘
31	55×40-72	無	
32	45×40-18	無	
33	35×30-22 30×25	無	二段掘
34	53×50-23 40×40	無	二段掘
35	35-29 30×30	無	一段掘
36	50-28 35×30	無	一段掘
37	30×20-14	無	
38	45×40-17 30×20	無	二段掘
39	85×70-37	丸形	
40	30×25-23	角形	
41	30-11	無	
42	80-35	無	
43	90×65-32	無	
44	35×30-29	無	
45	65×48-31	楕円形	

PitNo	規格(径-深さ)cm	柱形状	備考
46	50×45-32	無	
47	60-30	角形	
48	55×50-47 45×40	無	一段掘
49	50-24	無	
50	65×40-24 40×30	無	二段掘
51	65×55-46	無	
52	70×40-?	無	
53	65×45-70	丸形	
54	65×60-43	楕円形	
55	70-44	無	
56	60×50-48 30×30	無	一段掘
57	40×35-14	無	
58	30×30-17 25×25	無	一段掘
59	30×25-19	無	
60	52×45-15	無	
61	62×60-40 35×30	無	一段掘
62	50-34	角形	
63	45×30-19	無	
64	40-19 35×35	無	二段掘
65	35×30-27	無	
66	25-16	無	
67	35-13	無	
68	80×70-50	無	
69	60×40-27	角形	
70	45-29	無	
71	45×40-17	無	
72	80×65-46	板状	
73	30-29	無	
74	95×90-17	無	
75	35×25-25	無	
76	60×50-45	丸形	
77	50×45-29	無	
78	30×25-25	丸形	
79	40×30-32	無	
80	65×60-33 50×45	無	二段掘
81	105×90-72	丸形	
82	90×75-41 55×45	無	二段掘
83	70-?	無	
84	90×60-44	無	
85	80×55-34 60×50	無	一段掘
86	40-39	六角形	
87	60-30	角形	
88	50×45-?	無	
89	50-?	無	
90	25×20-18	無	
91	60-54 45×40	無	一段掘

PitNo	規格(径-深さ)cm	柱形状	備考
92	60-17 45×35	無	二段掘
93	40-19	丸形	
94	40×30-36	無	
95	55×40-20	無	
96	70-14	無	
97	40-10	無	
98	45×40-15	無	
99	45×40-52	無	
100	50-20	無	
101	60-61	丸形	
102	60×55-26	無	
103	100×35-18	無	
104	45×40-36	丸形	
105	35×30-15	無	
106	70×60-14	無	
107	60-40	長方形	
108	80×40-31	無	
109	70×60-62	無	
110	70×50-23	無	
111	40×30-21	丸形	
112	45×40-?	無	
113	45×30-40	無	
114	40-27	丸形	
115	65-42	無	
116	85×65-65 50×35	無	二段掘
117	60×45-39 35×30	無	二段掘
118	40×35-32	無	
119	50-51	無	
120	45×35-43	角形	
121	45×30-20	丸形	
122	50×45-35 40×40	無	一段掘
123	50×40-17	無	
124	95×70-38	無	
125	70×50-14	無	
126	35×30-16	無	
127	55×45-35	無	
128	65-68 35×30	無	一段掘
129	70×40-47	無	
130	59-16	無	
131	50×45-21	無	
132	40×35-35	無	
133	70-30	無	
134	70×40-25	無	
135	80×60-21	無	
136	50-24	無	
137	30-21	無	
138	80×50-25	無	
139	30×25-13	無	
140	30×25-11	無	
141	30×25-7	無	
142	40×30-9	無	

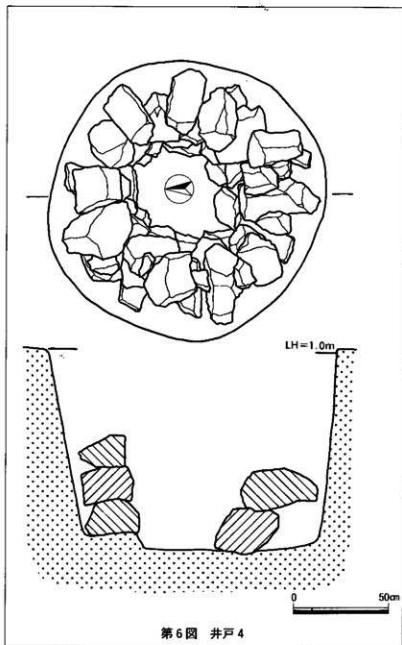
柱穴 (Pit) 一覧表

4. 土壌 (SK) (第3図)

全部で12ヶ所土壌を検出したが、ほとんどが正確不明のものであった。SK-01は230×370cm中には集石及び落ち込みの遺物をかなりの量検出した。SK-03は90×70-22.9cm、SK-04は90×80-21cm、SK-05は270×230、SK-06は140×115-42.5cmで、中に幅12~30cm・深さ25~50cmの石組水路のようなものを検出した。SK-07は70-18cm、SK-11は135×110-31.6cm、SK-12は120×105-20.5cm、SK-13は580×110cmである。

5. その他の遺構

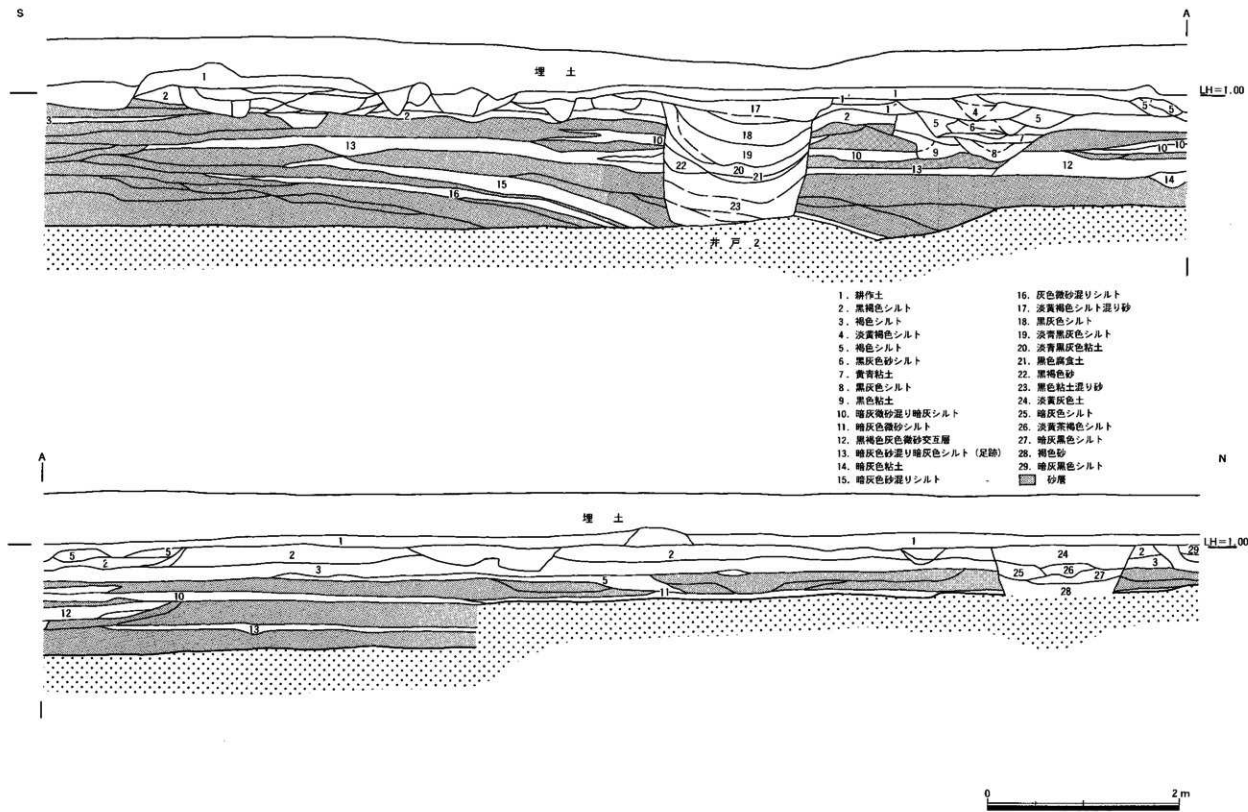
建物の基礎で攪乱された部分を確認の為に掘り下げた所足跡を確認した(第7図13層)。遺物等時代を確定できるようなものは検出していないが、層位的にみて縄文時代の物ではないかと考えられる。しかし花粉分析の結果、この層において稲作が営まれていた可能性が大きいことから再度検討の必要がある。



III 遺物

取り上げ番号にして約2800点を検出した。いわゆる古代の遺物は須恵器片を数点検出したが、ほとんどが中・近世のものであった。

灯明皿(第8・9図) 相当量出土していた。Na1~14はてづくねによるもの、Na15~37は底部に糸きりの残るものである。Na36は底部で墨書きがみられ、Na37は底部中央に円孔を穿つ。Na38~43は陶質のものである。Na44・45は灯明皿を受皿として小杯状の注口付き



第7図 調査区西壁土層断面図

油溜りを付けたものである。No46～48は陶質の皿でNo46には受部がつく。No49は低脚の付いたもので乗燭立のようである。No50は脚の付いたもので皿には受部が付く。

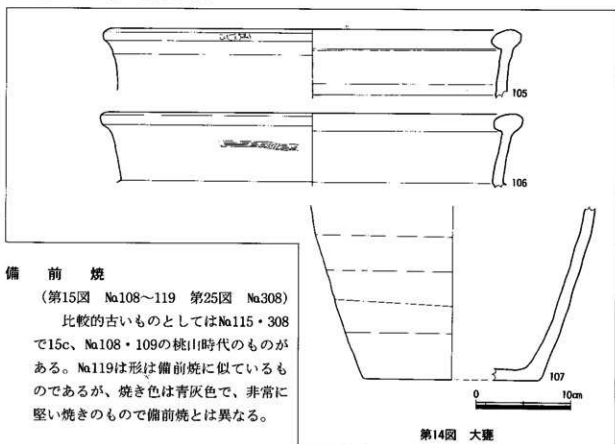
素 焼 (第9図) No51は手炙り、No52は上鍋である。No55～57は焼塩壺の蓋で、No58は焼塩壺で「泉湊伊織」の銘がある。

瓦 質 土 器 (第9図) No59・60は焙烙鍋、No61は火鉢である。No62は何に使われていたかは不明であるが、灯籠型をした置物のようである。

焙 烙 (第10・11図) 口縁部分の形態によって幾つかに分けられる。No63～67は口縁端部が平坦、No68～70は口縁端部は平坦で内外面に罫上につまみ出す。No71～73は口縁端部は丸く鈎状に内側に曲げる。No74～80は口縁端部を丸くおさめたもの、No81・82は口縁端部は丸いが内側に僅かに稜状の窪みがあるため口縁部がやや膨らんだようになる。底部はほとんどが扁平であったが、No83・84のように丸底のものも見られる。

播 鉢 (第12・13図 No85～104) No94が17c頃のものであるが、それ以外は比較的新しく19c以降のものである。

大 甕 (第14図 No105～107) 九州系のやきもので、ウジ返しの付いたトイレとして使っていたものと思われる。



備 前 焼

(第15図 No108～119 第25図 No308)

比較的古いものとしてはNo115・308で15c、No108・109の桃山時代のものがある。No119は形は備前焼に似ているものであるが、焼き色は青灰色で、非常に堅い焼きのもので備前焼とは異なる。

第14図 大甕

唐 津 焼 (第16図 No120~141) No120・121は絵唐津、124~126は三日月高台を持つものである。No135~138は唐津焼に上薬をかけ、磁器のように見せたキハラ唐津と呼ばれるものである。

伊 万 里 焼 No142~147 (第17図) は伊万里焼の初期のものである。No148~186 (第17・18図) は17c~18c、No187~207 (第19図) は19c~幕末にかけてのものである。No207~211 (第19図) は18~19c頃のものであるが、外側に青緑色の上薬をかけたいわゆる外青磁と呼ばれるものである。No212~219 (第20図) は底に銘のはいたものである。No220~231 (第20図) はコンニャク版によるものであるが、No220・221は少し古く17~18c頃のものである。第21図のNo232~238は蛇の日高台、No239~247は蛇の目軸刺ぎ、No248~261 (第22図) は蓋である。

輸入陶磁器 (第23図) No262李朝、No267・270・271中国明時代、No263・268は中国清時代、No266青磁、No269・272は16c頃の白磁である。No273・274は中国製品を模倣した東南アジア系のものである。

その他の陶磁器 (第24・25図) ほとんどが比較的時期の新しい地方の民窯で焼かれたものであるが、幾つか窯元のわかるものがある。No275・276は島根伊東焼、No310・311は島根布志名焼、No300は九州三島系である。時期の古いものではNo279の九州高取地方のもので16末~17c前半、No289の黒織部焼、No281・292の瀬戸美濃焼は16c等である。No299は江戸時代の紙判である。

土 鍾 (第26図) 全部で33コ出土した。No315~341は細身のもので、No342~347は太めのものである。

その他の遺物 (第27図) No348・349は紅皿、No352・353は玩具、No354~356は埴塙、No357はかんざし、No358は櫛、No359~364はケセル、No366・367は石半鐘である。

木 製 品 (第28図) No368~372は下駄、No372~379は漆碗である。

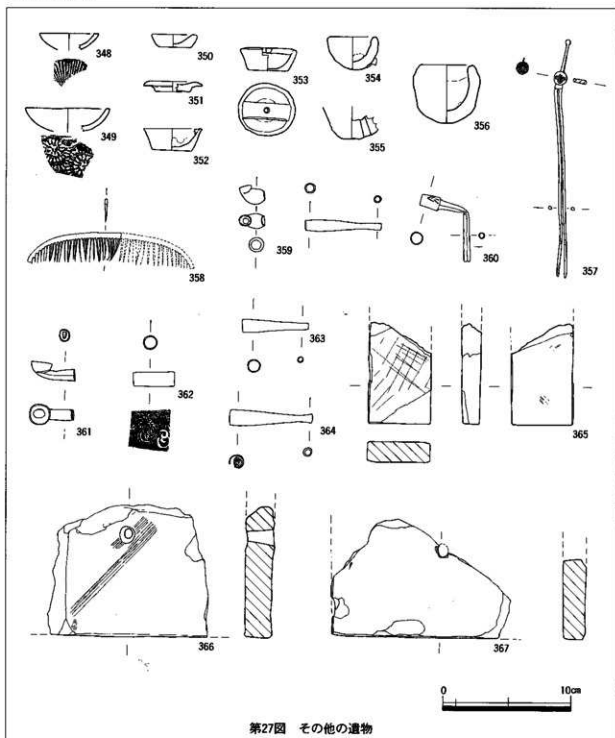
IV 小 結

今回の調査では溝状遺構を多く検出した。残念ながら遺構としては水田の確認はできなかったが、分析の結果この地で古くから稲作が行われていたことは間違いないようである。今回検出した溝はこうした稲作と密接な関係があると思われるが、溝と各層との関係を明確にすることが今回の調査ではできなかったため今後の課題となってしまった。

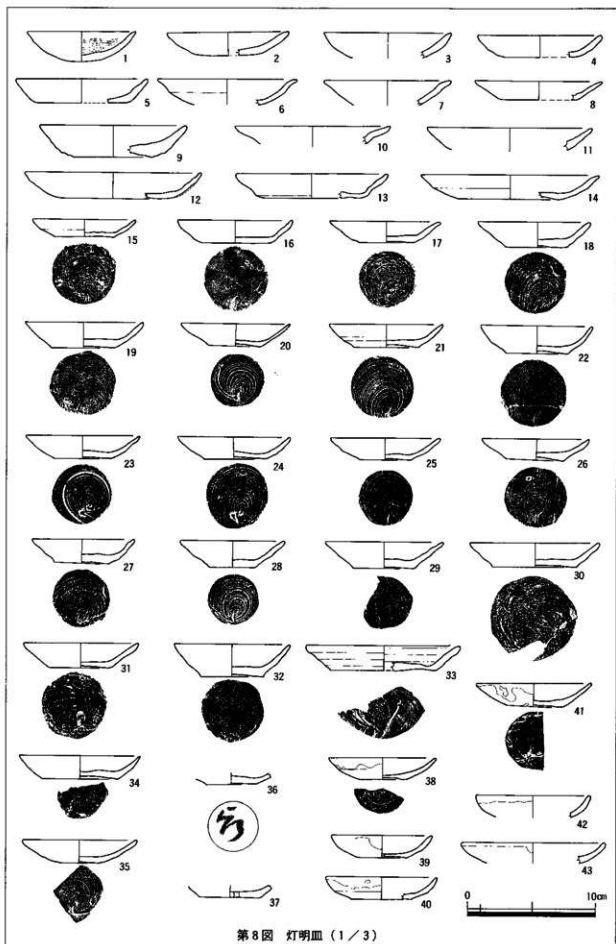
米子城下の遺構としては、武家屋敷跡と思われる柱穴列と井戸等を幾つか検出したのみであった。建物と井戸の関係、建物と溝の関係、建物と建物の関係などの相互関係をつかむことはできなかった。ただ遺物をもてみると、当然ではあるが生活に密着したもののばかりで、特に摺鉢・焙

烙鍋といったものが多く見られた。しかしながら全体に破片が多く完形品になるものは少なかった。そして器などは漆等を使って手直して再利用しているものが幾つもみられたり、摺鉢も溝が磨滅するまで使用するなど、当時の生活の一端を伺う事ができるようである。

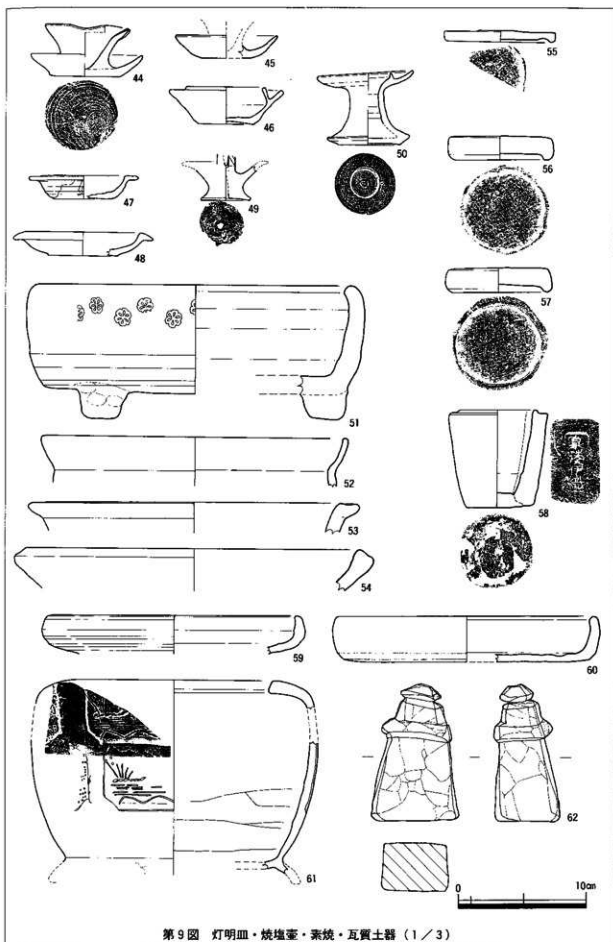
米子城に関する調査が近年盛んに行われるようになった。それに伴って当時の米子城下の様子も点から線へととなりつつある。しかしながら今後単に屋敷跡等を確認する考古学的な調査だけではなく、視点を変えた科学的な調査も踏まえて、新たな見解の下で米子城下の調査が行われることを期待すると共に、米子城下以前の調査についてもより一層の検討が行われることを期待するものである。



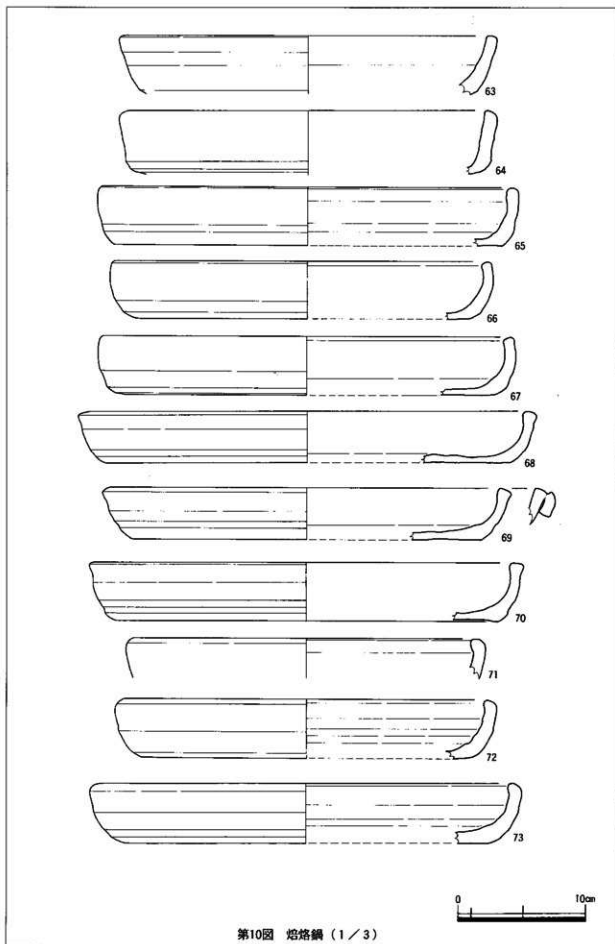
第27図 その他の遺物



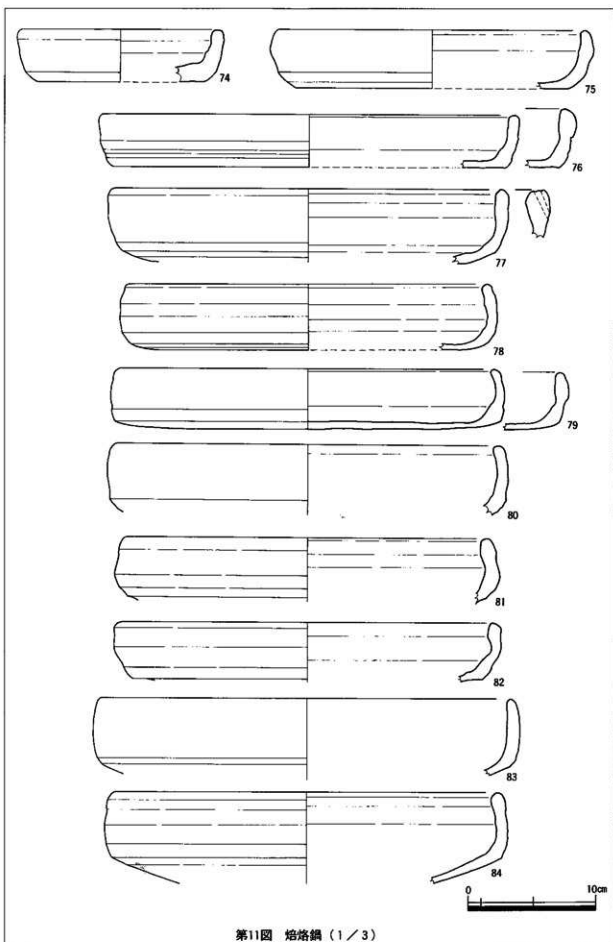
第8图 灯明皿 (1/3)



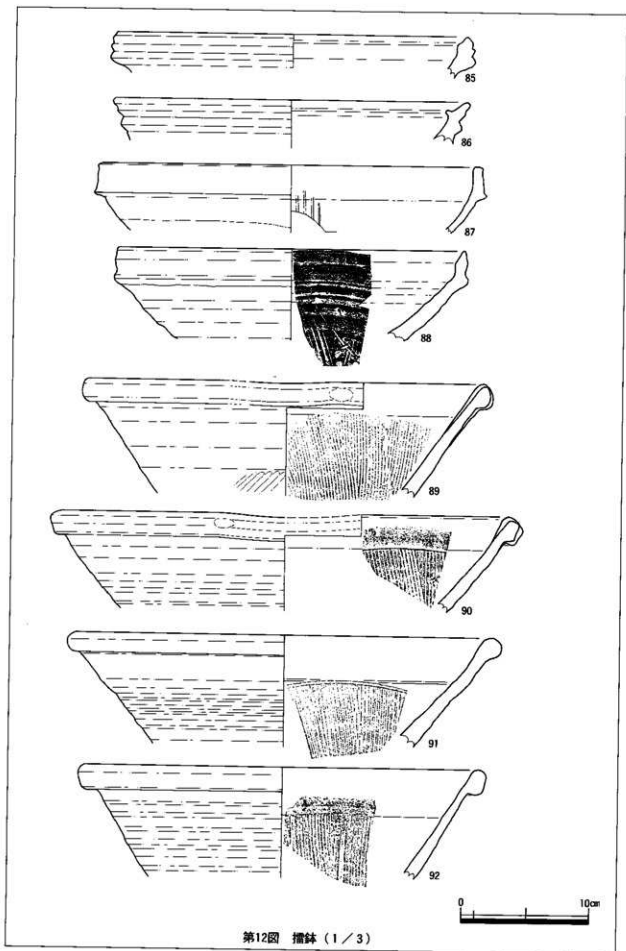
第9圖 灯明皿・焼塩壺・素焼・瓦質土器（1／3）



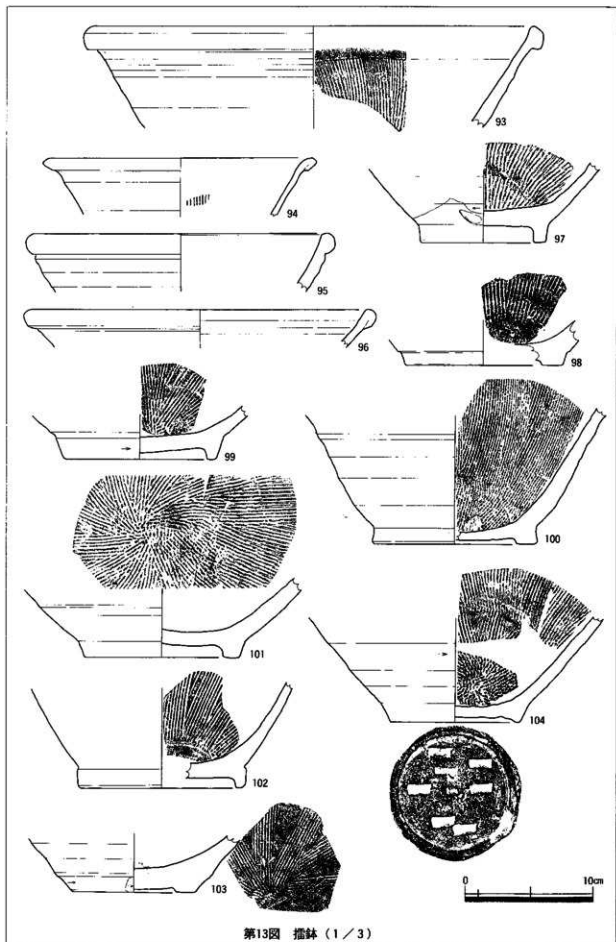
第10圖 鎚烙罎 (1 / 3)



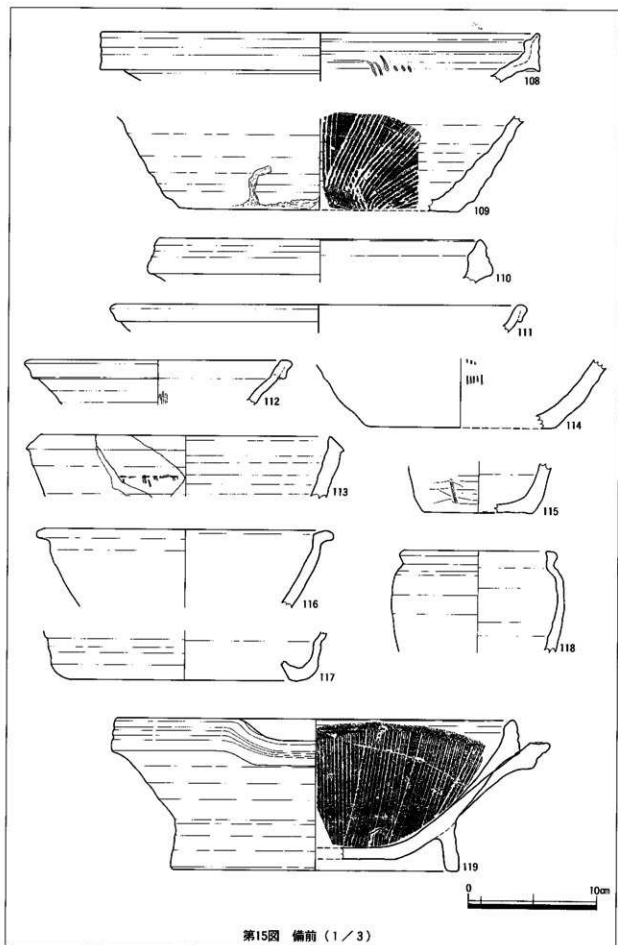
第11圖 烙烙鎗 (1/3)



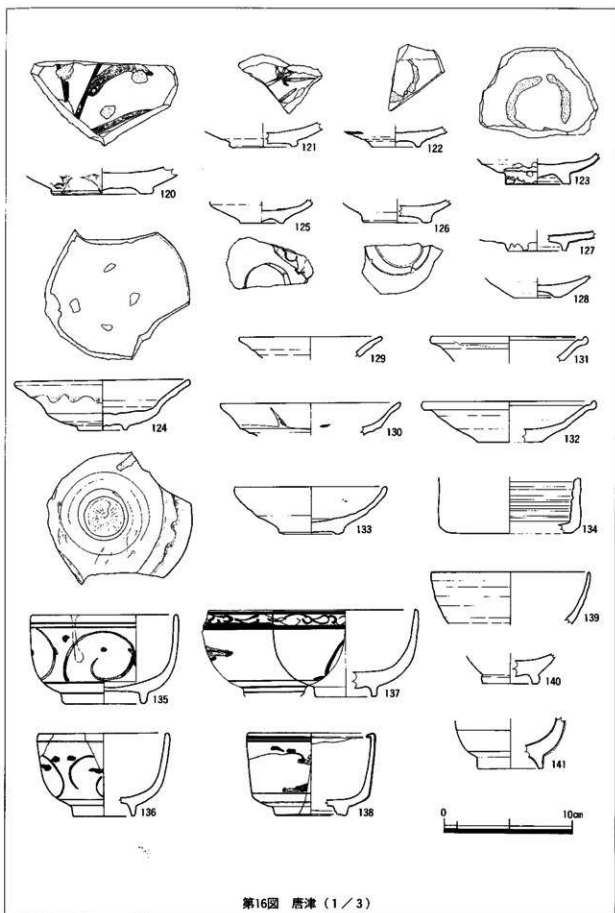
第12圖 槽鉢 (1 / 3)



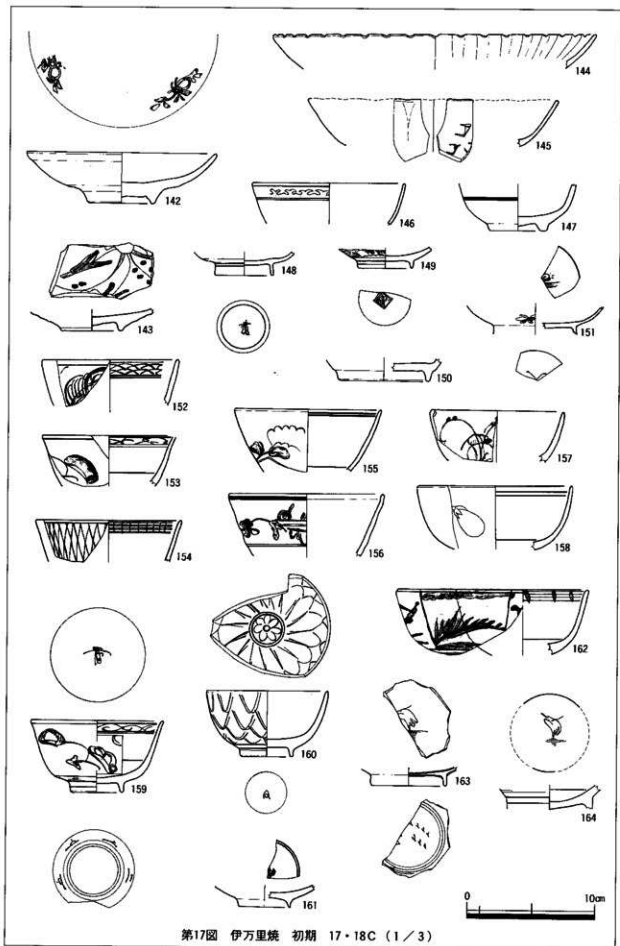
第13図 摺鉢 (1/3)



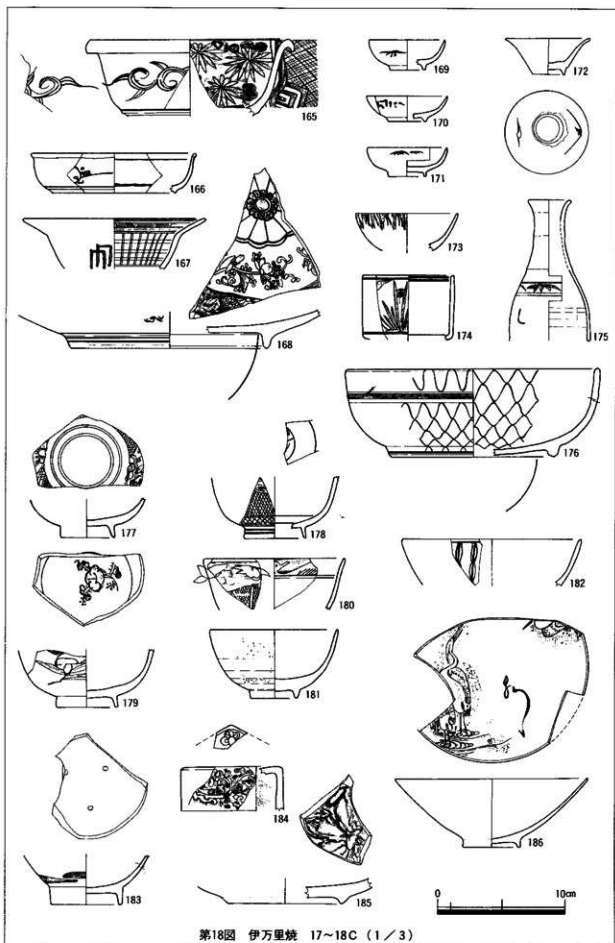
第15図 備前 (1/3)



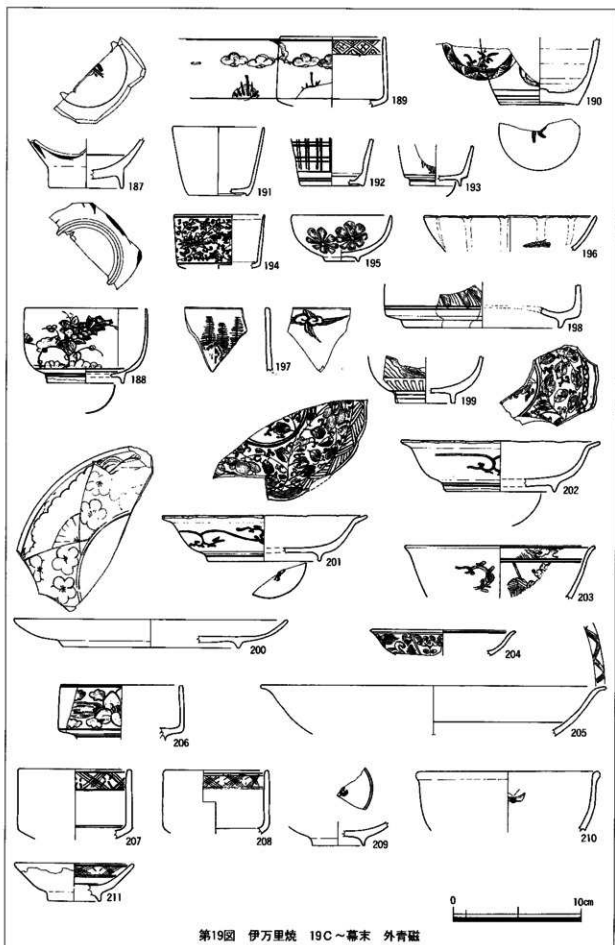
第16図 唐津 (1/3)



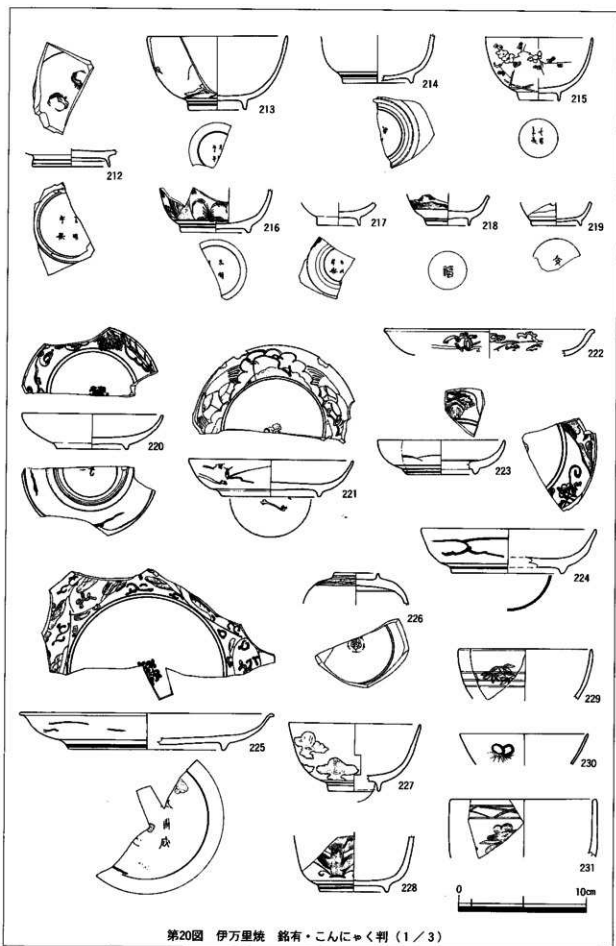
第17図 伊万里焼 初期 17・18C (1/3)



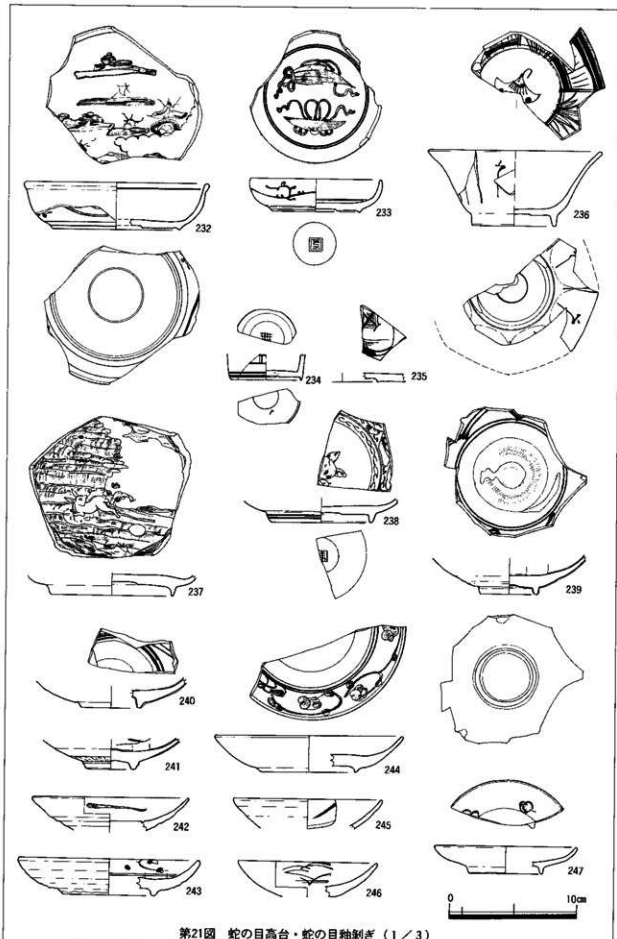
第18图 伊万里烧 17~18C (1/3)



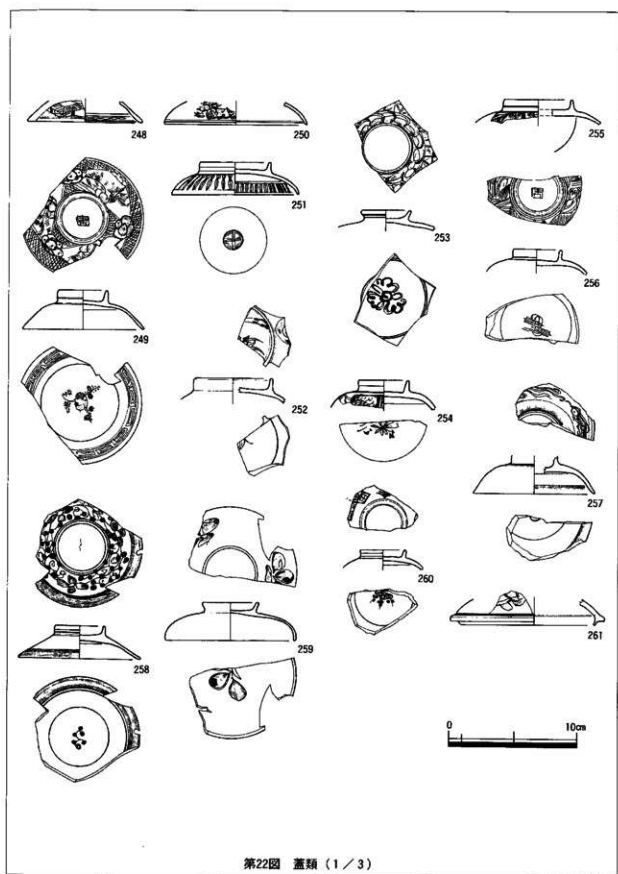
第19図 伊万里焼 19C~幕末 外青磁



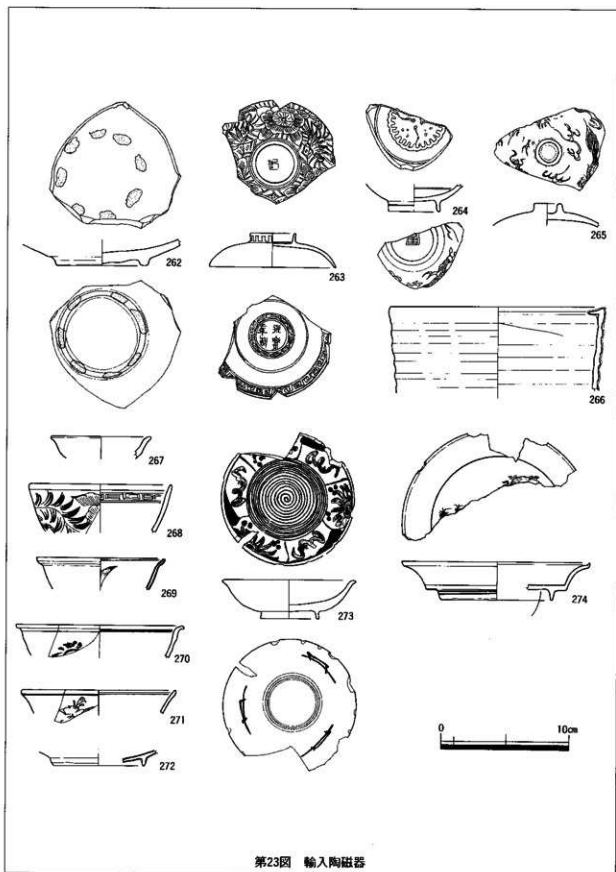
第20図 伊万里焼 銘有・こんにゃく判(1/3)

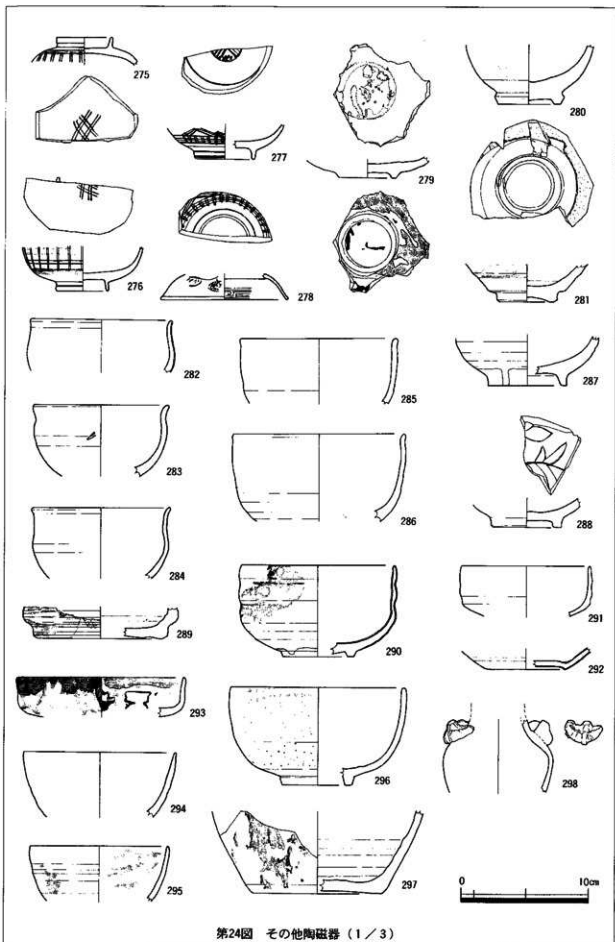


第21図 蛇の目高台・蛇の目軸刺ぎ (1/3)

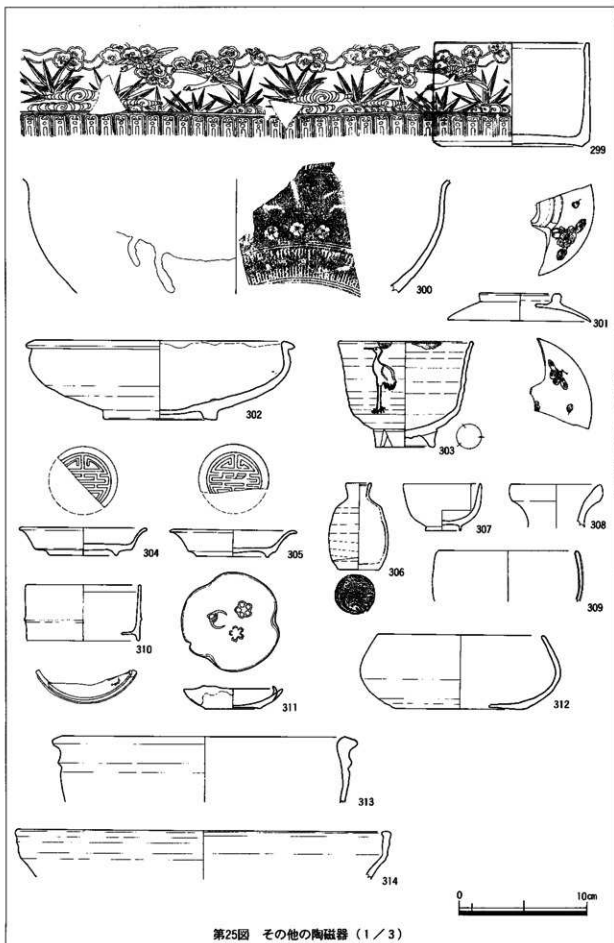


第22図 蓋類 (1 / 3)

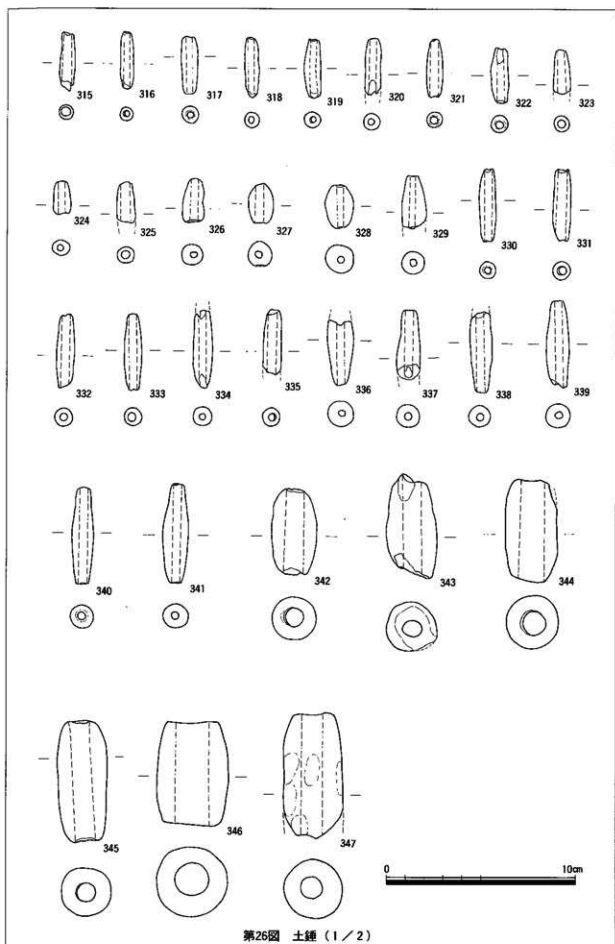




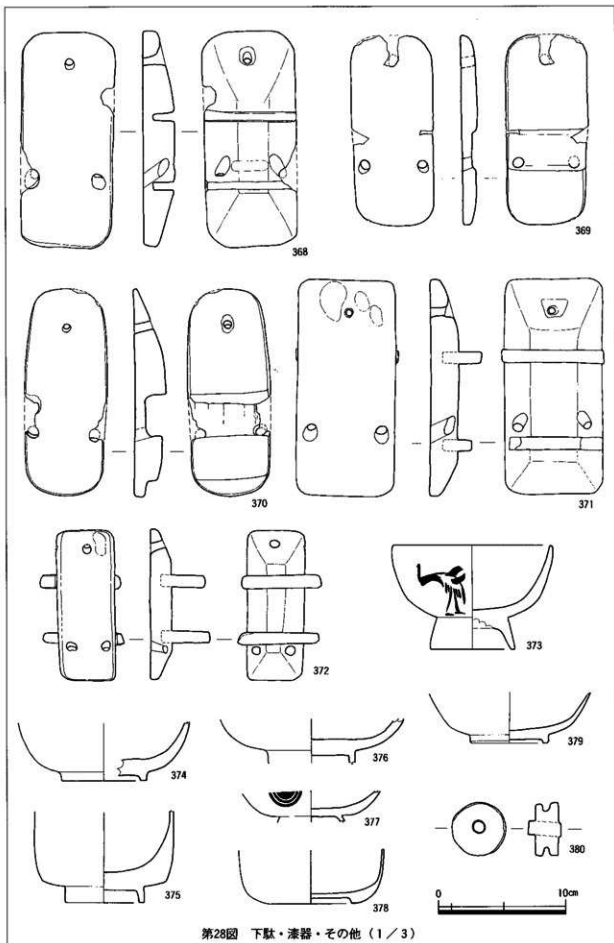
第24図 その他陶磁器 (1/3)



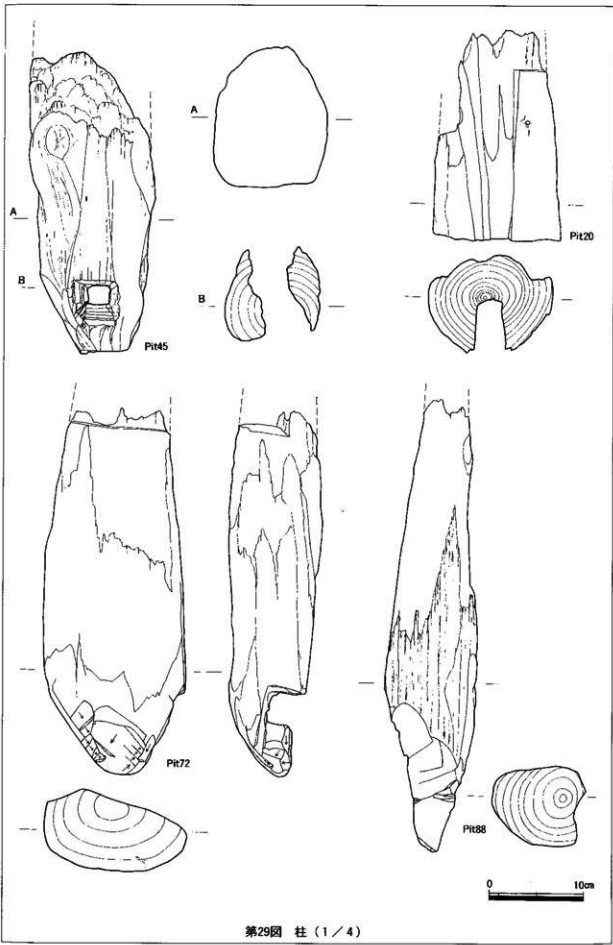
第25図 その他の陶磁器 (1 / 3)



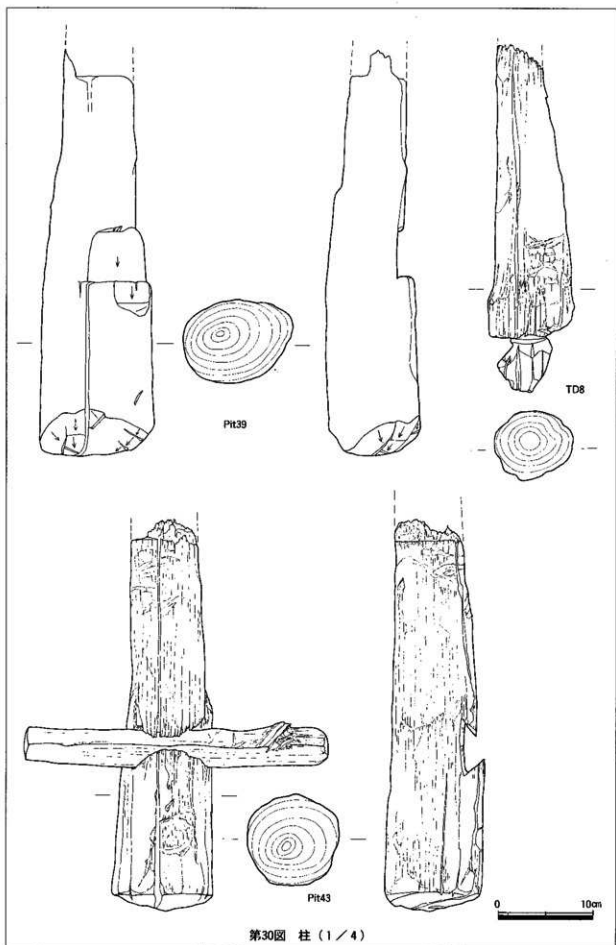
第26圖 土罐 (1/2)



第28図 下駄・漆器・その他 (1/3)



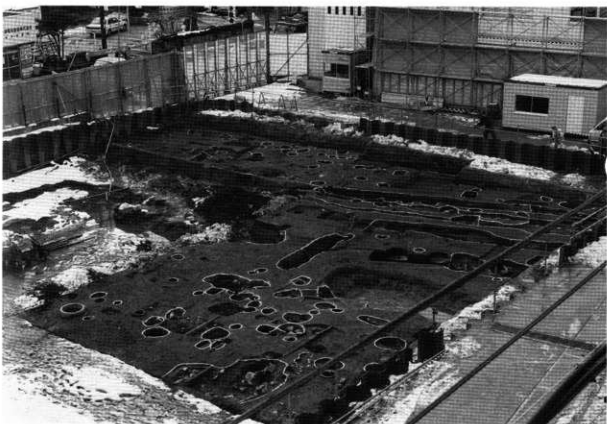
第29圖 柱 (1/4)



第30圖 柱 (1 / 4)



調査地全景 西側より



調査地全景 東側より



井戸1



井戸1 木枠



井戸4



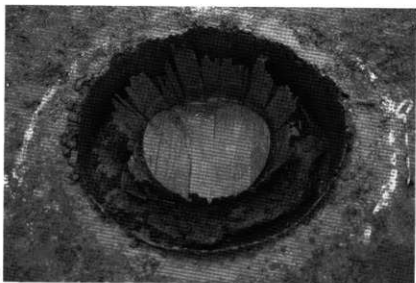
作業状況



井戸4



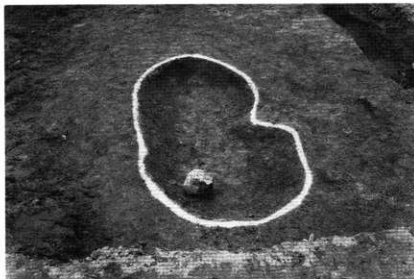
桶



桶



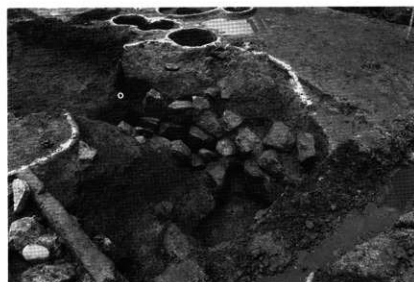
SK-07



SD-06



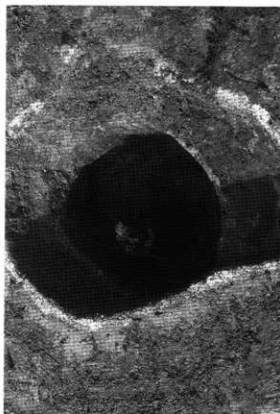
SK-06



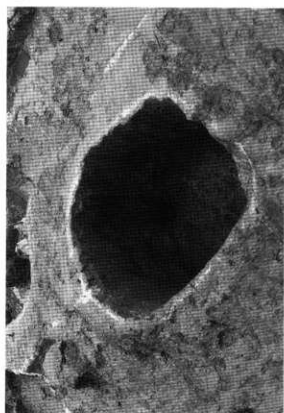
SK-06
水路検出
状況



P 9



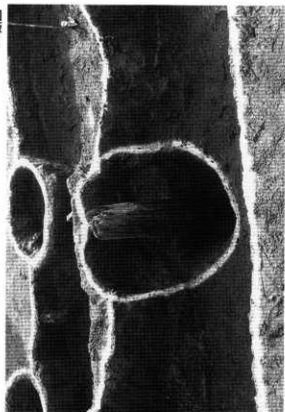
P 19



P 7



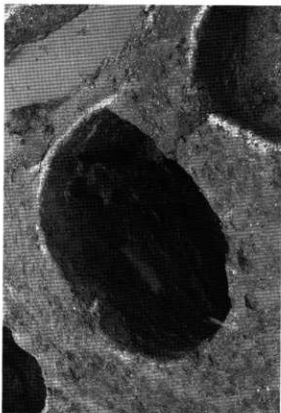
P 28



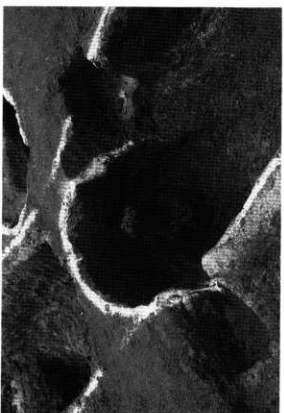
P102



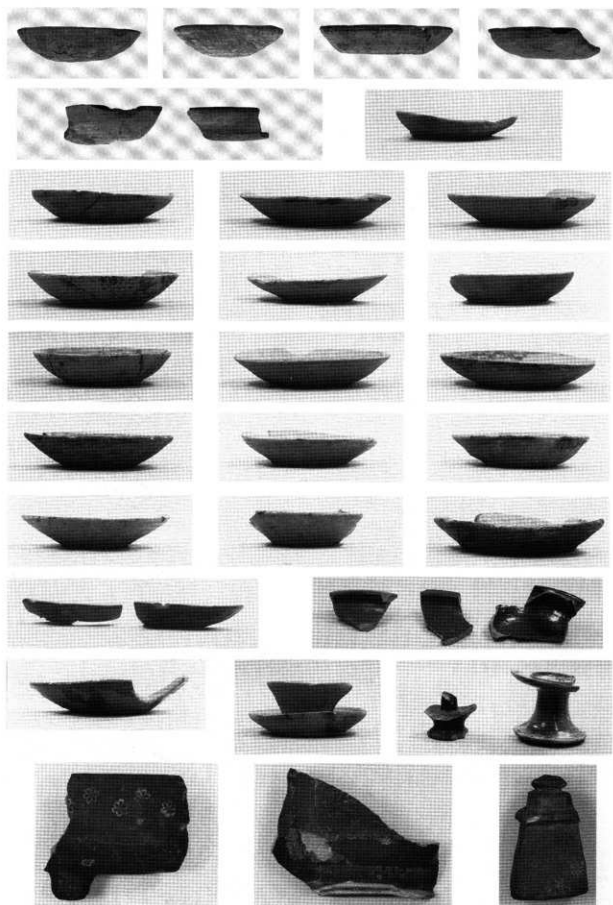
P18



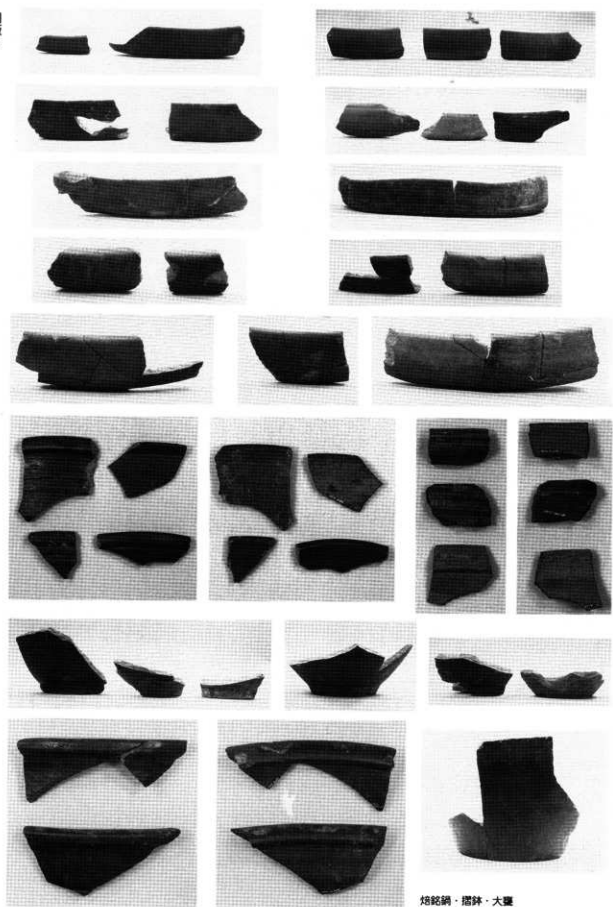
P53



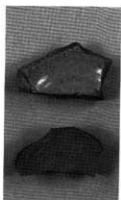
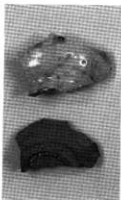
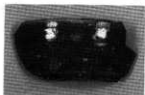
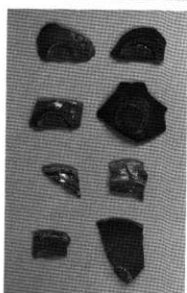
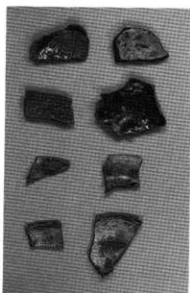
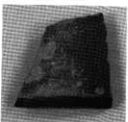
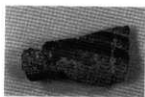
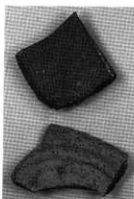
P16



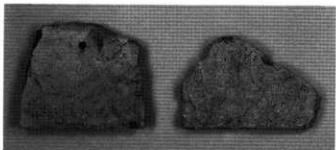
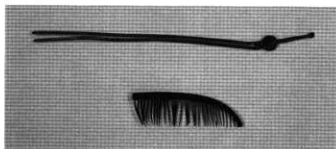
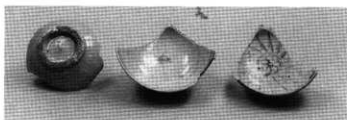
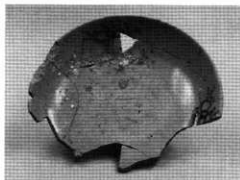
灯明皿・手炙り・火鉢・灯籠型製品



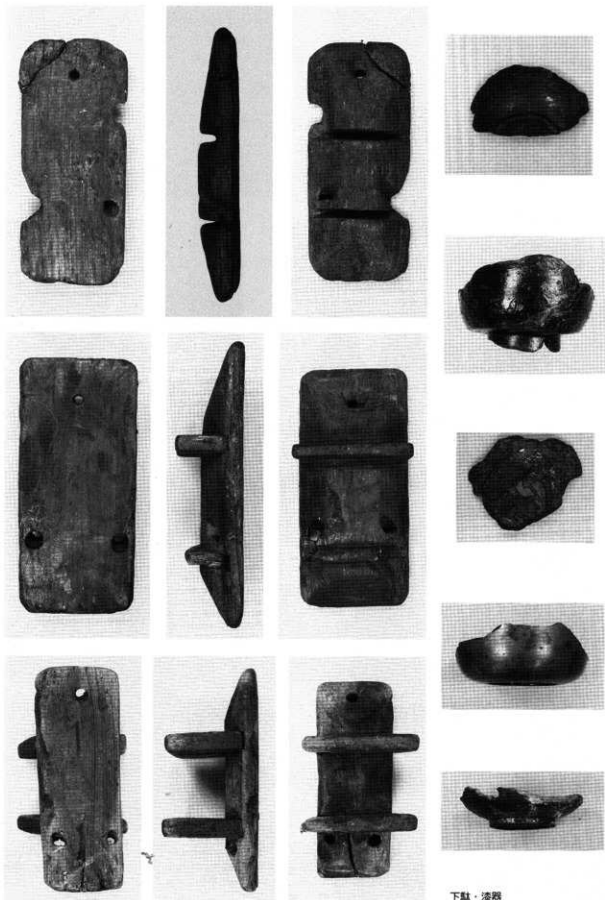
烜範銅·罍鉢·大甗



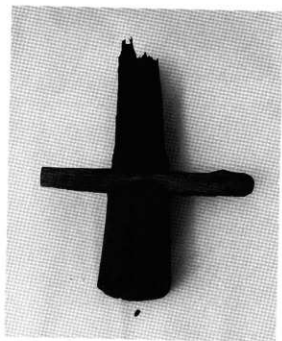
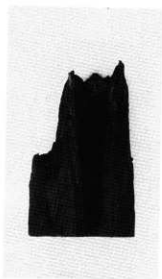
備前焼・唐津焼



初期伊万里・焼塩壺・土鍾・缸皿
遊技具・かんざし・くし・キセル・石板



下駄・漆器





唐津焼・伊万里焼

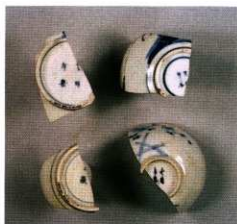


伊万里烧





伊万里焼



伊万里焼（銘有・コンニャク判）



伊万里焼（蛇の目高台・蛇の目輪刺ぎ）



伊万里烧盖・輸入陶磁器



その他の陶磁器

米子市教育文化事業団文化財調査報告書 5

米子城跡Ⅲ

— 米子市加茂町2-51地点 —

発行 1995年3月

発行者 財団法人 米子市教育文化事業団埋蔵文化財調査室

〒683 鳥取県米子市中町20 TEL0859-22-7209

印刷 (株)米子プリント社

〒683 鳥取県米子市旗ヶ崎2218 TEL0859-22-2155